

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

2. 令和2年度後期末授業評価アンケート調査結果

2.1 人間学部

はじめに

本報告書は、令和2年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された112科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者各自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較できないため、本報告書では扱わないこととする。

(1) 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図1（心理学科9科目）、および図2（コミュニケーション学科10科目）にそれぞれ示した。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は307名で、各学年それぞれ1年生=189名、2年=118名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は250名で、各学年それぞれ1年=93名、2年=157名であった。心理学科では、1年生の評価がいずれの項目でも昨年度よりも高いが、2年生についてはすべての項目がほぼ昨年度と同様であった。コミュニケーション学科では、1年生については心理学科同様に、すべての項目で評価が高くなっている。しかし、2年生については、すべての項目で昨年度よりも評価が低くなっている。共通教養科目については、今年度後期も遠隔授業となり、1年生には受け入れられたが、対面授業を経験していた2年生については受け入れにくいところがあったのかもしれない。

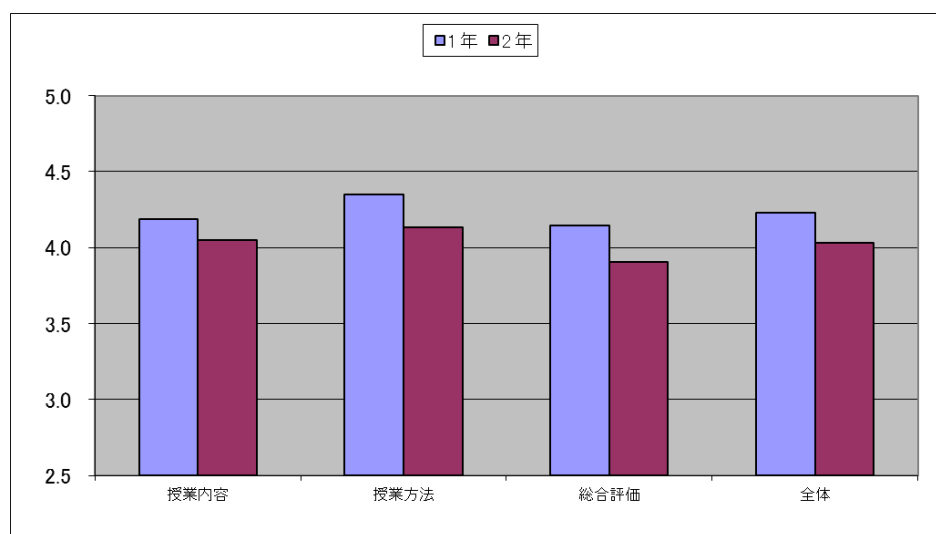


図1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=189名、2年=118名

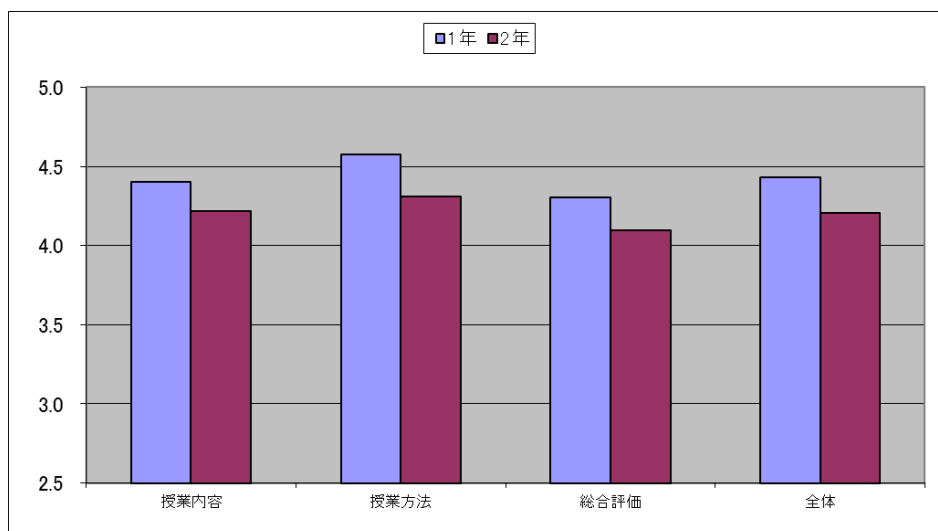


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=93名、2年=157名

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科14科目）、および図4（コミュニケーション学科11科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は149名で、各学年それぞれ1年=95名、2年=54名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は107名で、各学年それぞれ1年=44名、2年=63名であった。

心理学科においては、昨年度の評価と比べると、1年生の授業内容については昨年度より高く評価されているが、他の項目および2年生のすべての項目については、昨年度とほぼ同様の評価となっている。コミュニケーション学科においては、昨年度の評価と比べると、授業方法がいずれの学年においても評価が高くなっており、2年生の総合評価も高くなっている。その他の項目については、ほぼ同じ評価であった。共通語学科目についても遠隔授業であったが、担当教員が遠隔授業に合わせた方法を工夫した結果であるといえよう。

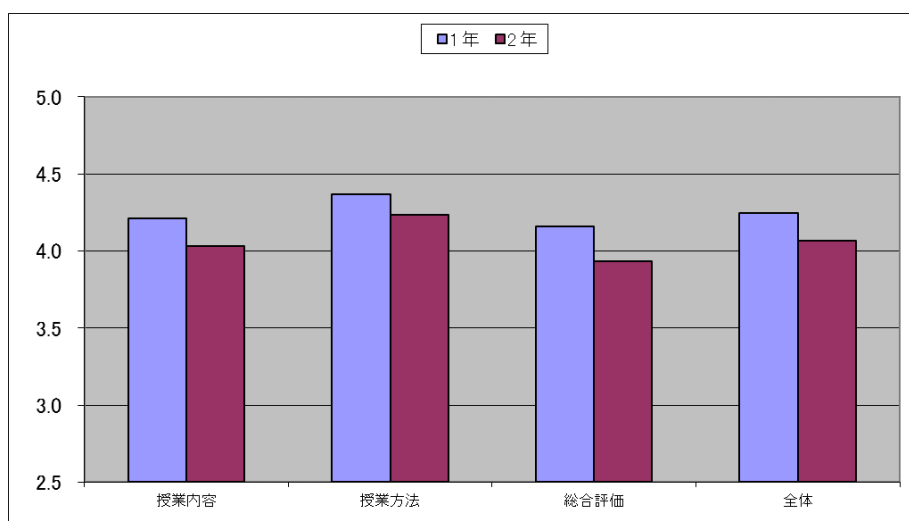


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=95名、2年=54名

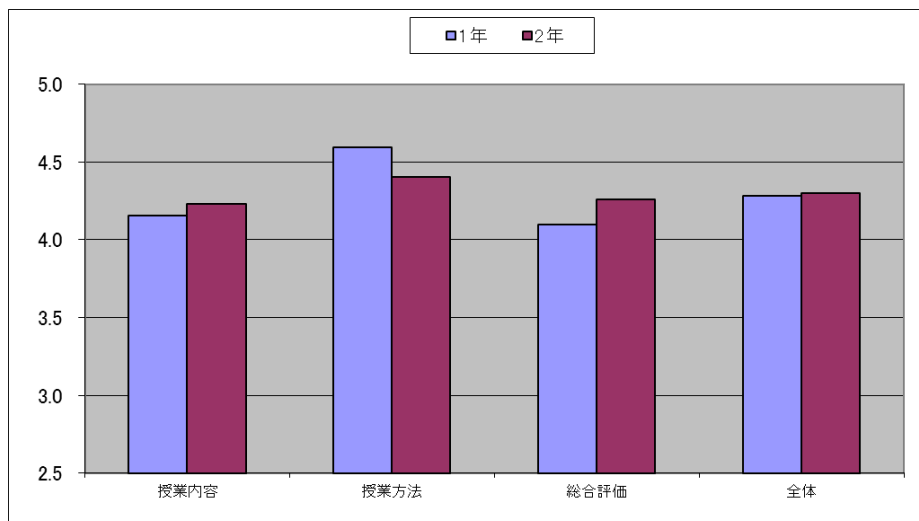


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=44名、2年=63名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 27 科目、コミュニケーション学科 41 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図5（心理学科）、および図6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図5に示された心理学科の学生の延べ人数は1,053名で、各学年それぞれ1年=409名、2年=318名、3年=289名、4年=37名であった。また、図6に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は589名で、各学年それぞれ1年=183名、2年=221名、3年=163名、4年=22名であった。

心理学科においては、昨年度の評価と比べると、すべての項目において高い評価となっている。コミュニケーション学科においては、昨年度の評価と比べると、1年生と3年生はすべての項目で評価が高くなっているが、2年生については授業方法の評価が低くなっており、他の項目は昨年度並みである。両学科とも、概ね高評価であったが、コミュニケーション学科2年生については昨年度よりは評価が高くなかった。この原因についてはさらに分析を進める必要がある。

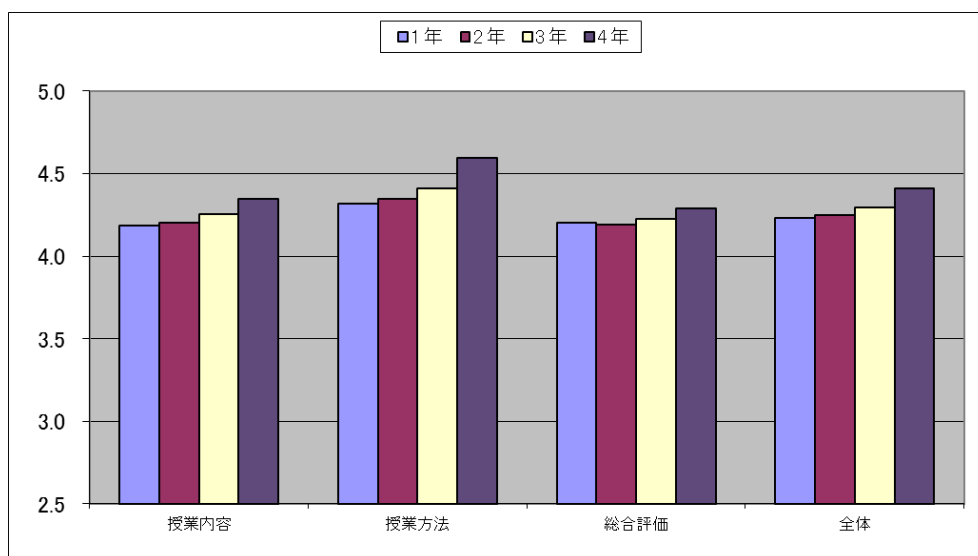


図5 心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=409名、2年=318名、3年=289名、4年=37名

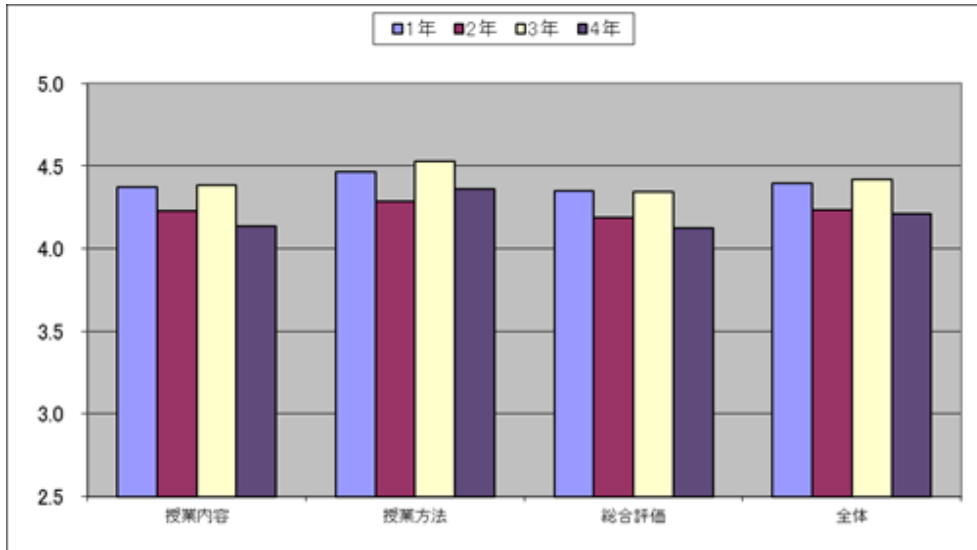


図6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=183名、2年=221名、3年=163名、4年=22名

(4) 共通科目と専門科目の比較

本節以降7節まででは、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は112科目であったが、学部共通科目13科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図7は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ10、22科目、コミュニケーション学科では、9、36科目であった。

心理学科においては、共通科目も専門科目も昨年度より高くなっている。一方、コミュニケーション学科においては、共通科目は高くなっており、専門科目については昨年度と同様の評価である。

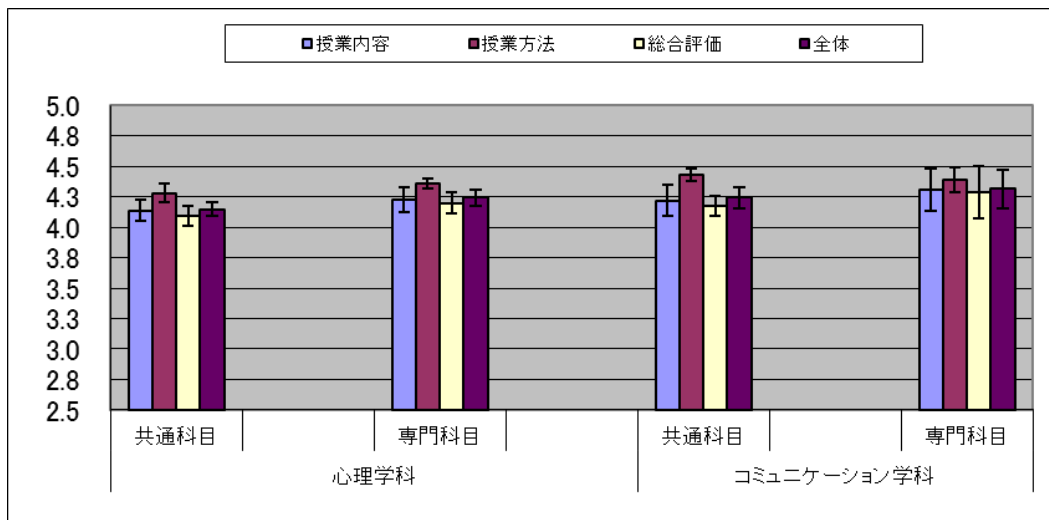


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)

(5) 必修科目と選択科目の比較

図8は別の履修形態ごと（必修科目と選択科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ9、23科目、コミュニケーション学科では、9、36科目であった。本年度は両学科ともに選択科目の評価の方が高い傾向にある。心理学科では必修科目が若干高く評価されており、選択科目は高く評価されている。コミュニケーション学科においては、必修科目は若干高く評価されているが、選択科目は昨年度同様の評価である。

心理学科については、必修科目は遠隔授業で行われていたが、前期同様、若干であるが高い評価を受けることとなった。選択科目については、面接授業に切り替えたものが多く、もしかしたらそれが高評価となった原因かもしれない。対して、コミュニケーション学科は、選択科目においては、遠隔のままであったものが多く、特に演習科目の多くが遠隔授業であった。また、2年生科目の面接授業の回数が少なかった。演習科目において、面接授業でないものが多かったことが、評価があまり高くならなかった要因かもしれない。

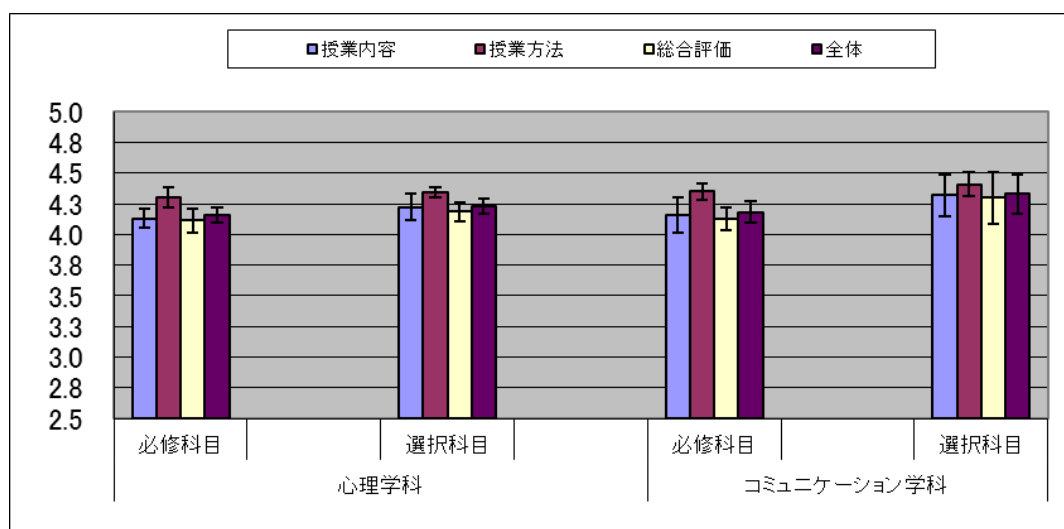


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点（±SD）

(6) 科目の履修者数による比較

図9は履修者数（履修者が40名未満の科目と40名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものである。なお、40名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が40名未満の科目および40名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ8、24科目、コミュニケーション学科では、33、12科目であった。

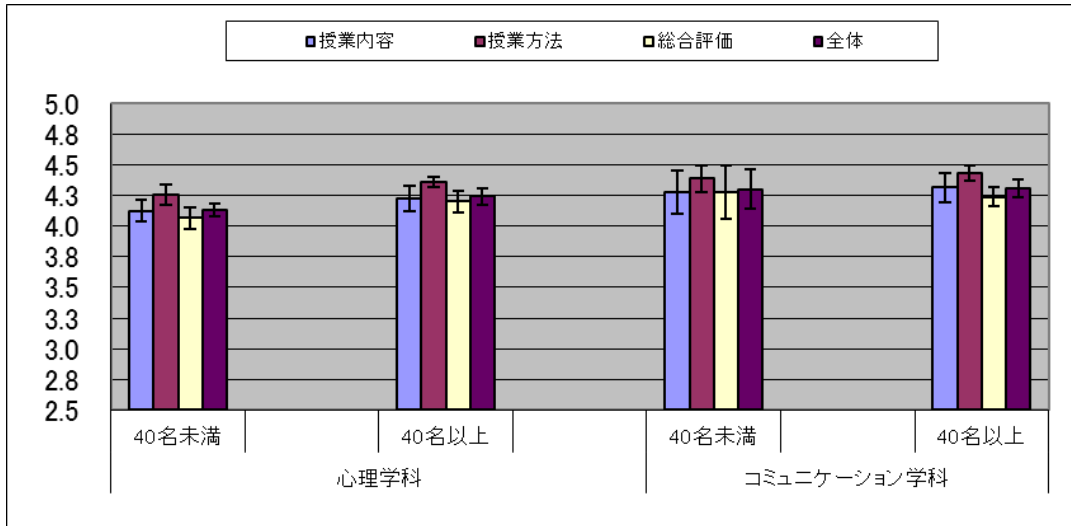


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

次に、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したのが、図10（心理学科）と図11（コミュニケーション学科）である。

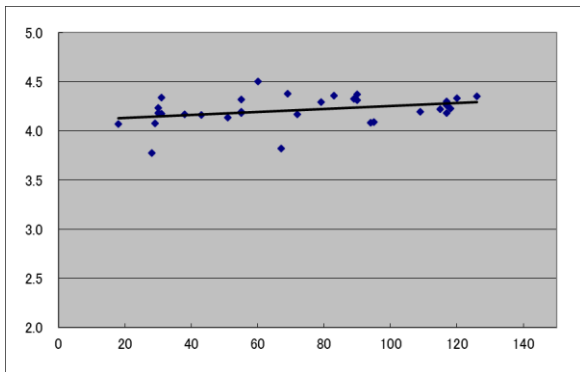


図10 心理学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = 0.34$ (n=32)

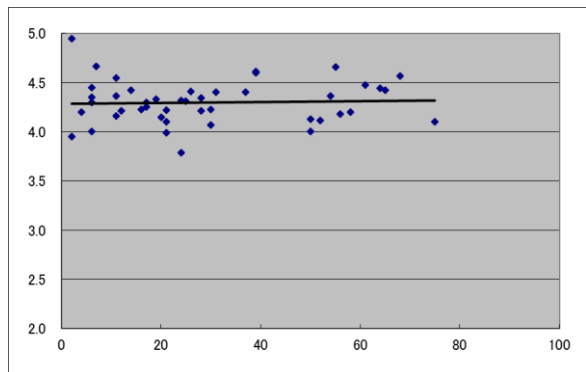


図11 コミュニケーション学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = 0.04$ (n=45)

心理学科では、履修者数が多くなるほど評価が高くなっているが、コミュニケーション学科では履修者数による違いは見られなかった。心理学科の授業は講義科目が多く、遠隔授業であったものも多いが、遠隔授業においては履修者数が多かろうと少なかろうと受講者には影響しないと考えられる。逆に、遠隔授業であったがゆえに、履修者数の多い授業でも、集中できたのではないだろうか。コミュニケーション学科については、遠隔授業でも双方向の場合が多かったが、この場合は人数の影響を受けなかったのではないだろうか。

(7) 回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものを図12に示した。それぞれの科目数は心理学科が3、7、22科目、コミュニケ

ーション学科が3、6、36科目であった。両学科ともにすべての科目において回収率は概ね57%であり、昨年度よりも非常に低くなっていた。

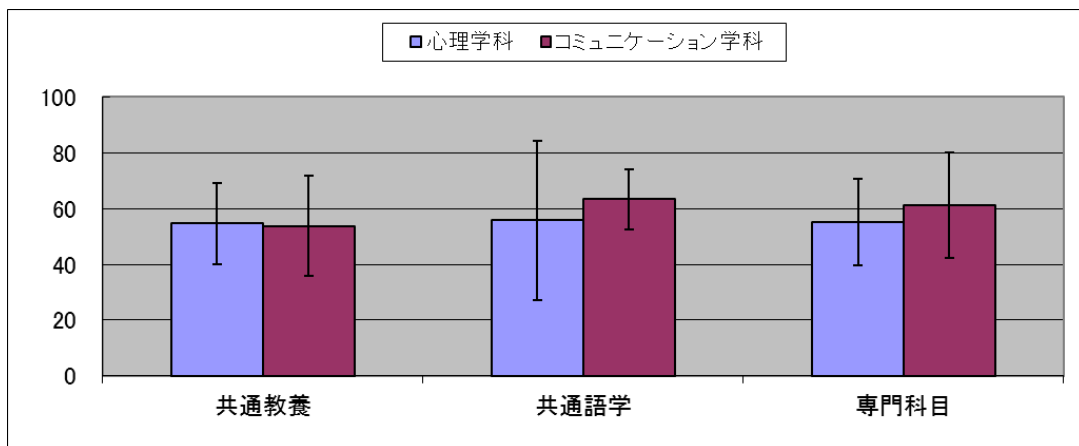


図 12 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

(8) 学修時間と学修行動

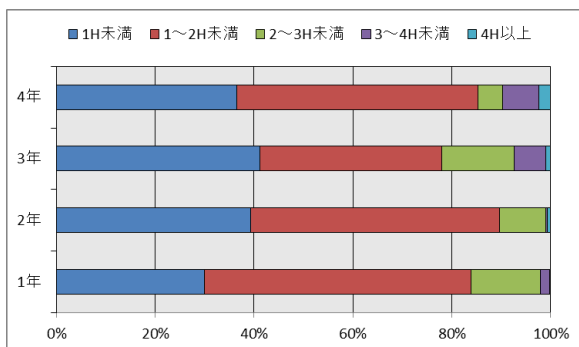


図 13 心理学科の授業外での学修時間

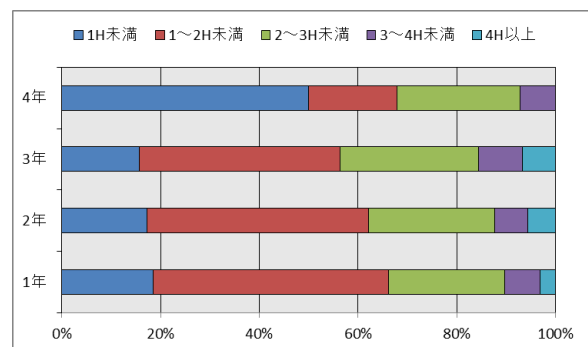


図 14 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 13 および図 14 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。心理学科については、その科目に関する学習時間が1h未満の学生がどの学年においても昨年度より減少しており、全体的に学修時間が増加している。コミュニケーション学科については、1年生から3年生は、心理学科同様、昨年度よりも学修時間が増加していたが、4年生については減少していた。全体的には、遠隔授業で課題が増えたり、ビデオの見直しや資料の見直しがしやすくなって復習を行ったりする学生が増えたのではないかと推測する。

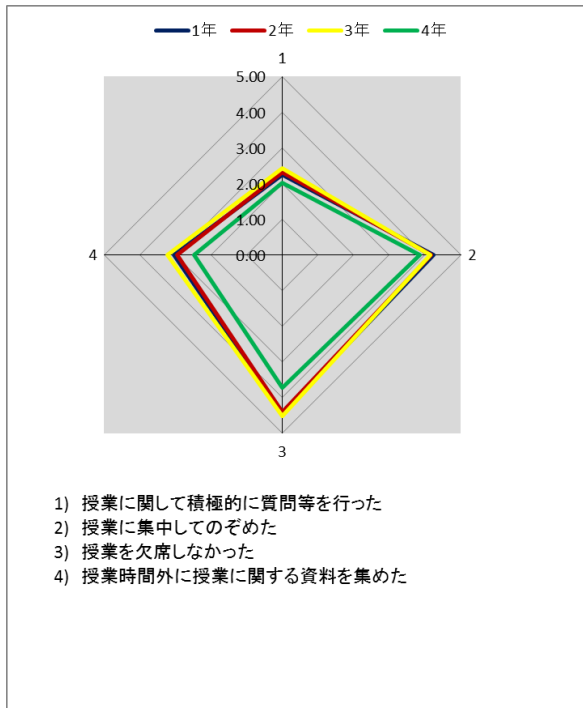


図 15 心理学科の学修行動

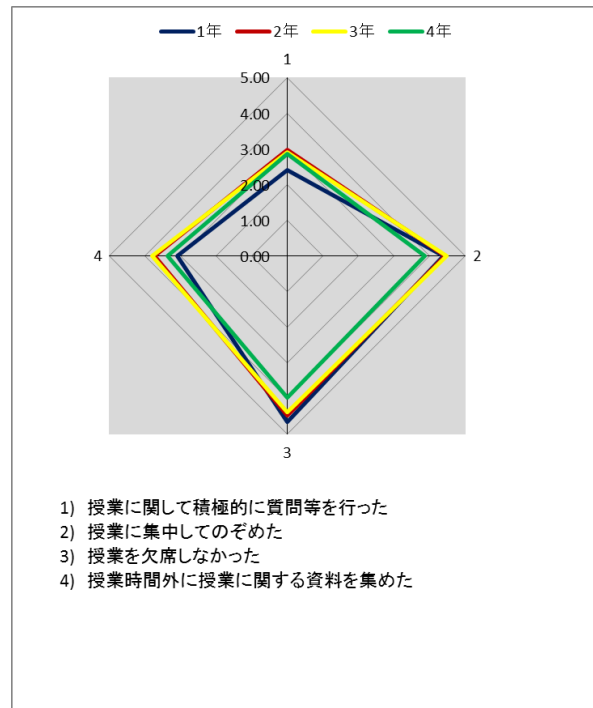


図 16 コミュニケーション学科の学修行動

各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 15 および図 16 に示した。ただし、遠隔授業が中心となったため、4 項目に質問を減じた。両学科とも、質問 1、2、3 はいずれの学年も昨年度とほぼ同様であるが、質問 4「授業外に授業に関する資料を集めた」については、両学科とも昨年度より低くなっていた。質問 1、2、3 については、まじめに授業に取り組んでいる姿勢が伺える。しかし、質問 4「授業外に授業に関する資料を集めた」が低かったのは、遠隔授業が多く、面接授業のために大学に来て、授業後すぐに帰宅するように仕向けられたため、図書館等での調べ物を十分に行えなかったのではないかと推測される。

(報告：矢橋 知枝)

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

2. 令和2年度後期末授業評価アンケート調査結果

2.2 人間生活学部

はじめに

本報告は、令和2年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された122科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する15項目（評価基準は1～5点）の計17項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計15項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- 設問群①：「授業内容」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群②：「授業方法」 2項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群③：「総合評価」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問④：「学修時間」 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、4h以上）の比
- 設問群⑤：「学修行動」 4項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として15項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いることで検討できることもあると考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、「令和元年度仁愛大学FD推進活動報告書」を御覧ください。

（8）共通教養科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において9科目から回答を得た（図1参照）。延べ回答人数は、1年生が173名、2年生が46名であった。3年生と4年生はともに1名で、回答者が10名以下であったため、規定に従いグラフから除外した。1年生は「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」の全項目が4.0以上であった。2年生も同様に全ての項目で4.0以上であった。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において10科目から回答を得た（図2参照）。延べ回答人数は、1年生が128名、2年生が36名、3年生2名、4年生0名であった。回答者が10名以下の学年はグラフから除外した。

1年生は全ての項目が4.0、2年生は「総合評価」が僅かに4.0を下回ったが、その他の3項目で4.0以上であった。

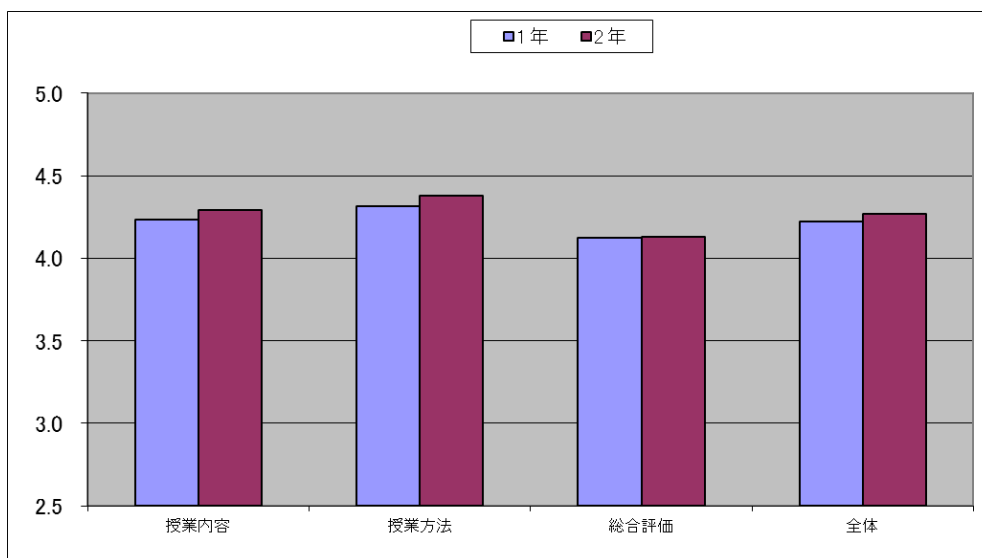


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=173名、2年=46名

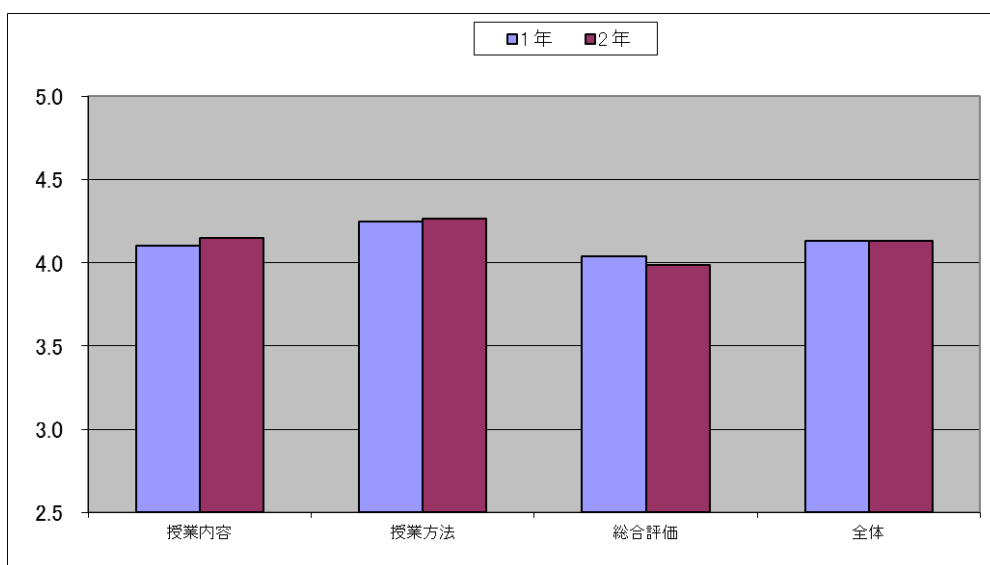


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=128名、2年=36名

(9) 共通語学科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において6科目から回答を得た（図3参照）。延べ回答人数は、1年生が84名、2年生が8名であった。回答者が10名以下の学年はグラフから除外した。

1、2年生ともに全ての項目で4.0以上であった。

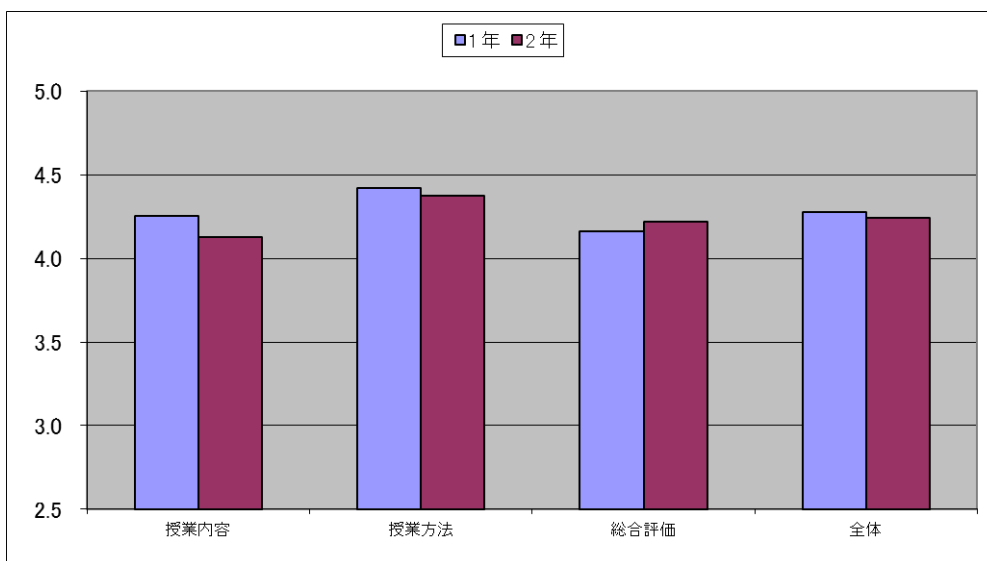


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=84名、2年=8名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において7科目から回答を得た（図4参照）。延べ回答人数は、1年生が65名、2年生が8名、3年生は2名であった。回答者が10名以下の学年はグラフから除外した。

1年生、2年生とも全ての項目で4.0以上であった。

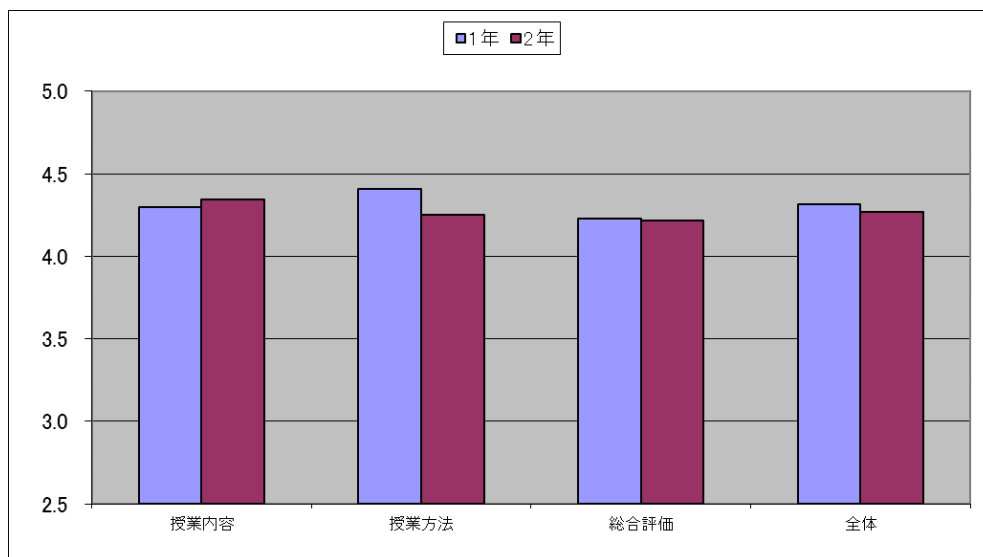


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=65名、2年=8名

(10) 専門科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する専門科目において44科目から回答を得た(図5参照)。延べ回答人数は、1年生が358名、2年生が509名、3年生が346名、4年生が37名であった。1~4年生の全学年において全ての項目で4.0以上であった。

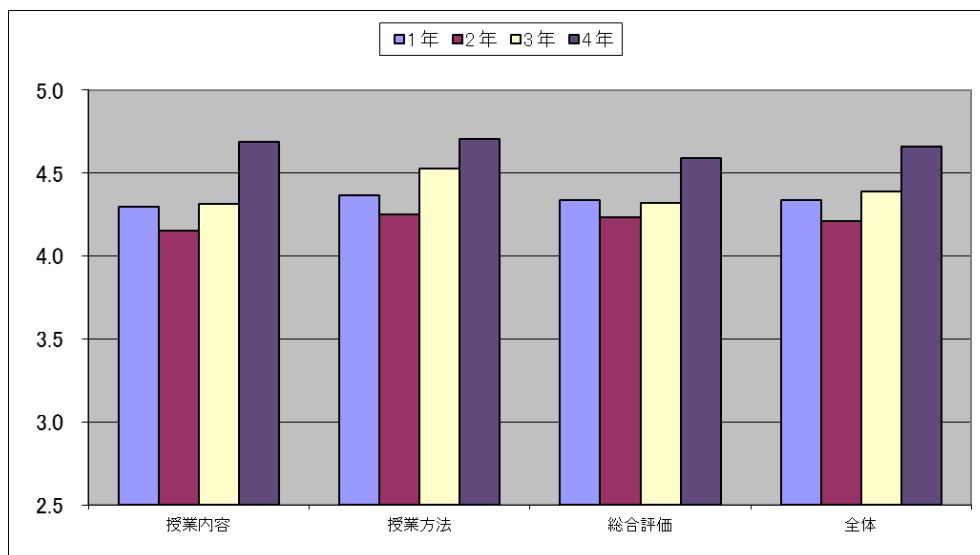


図5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=358名、2年=509名、3年=346名、4年=37名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、46科目から回答を得た(図6)。述べ回答人数は、1年生が357名、2年生が218名、3年生が260名、4年生が18名であった。

全学年において全ての項目で4.0以上であった。

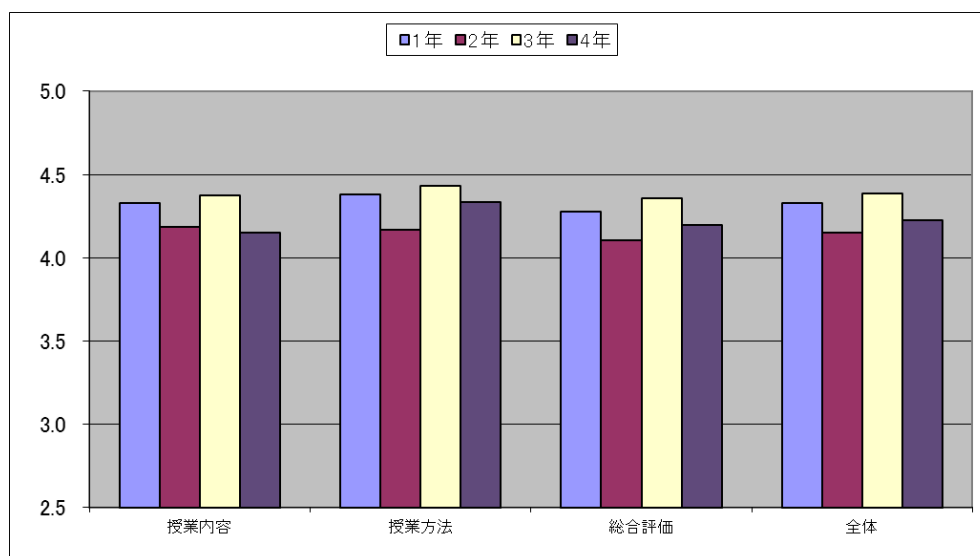


図6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=357名、2年=218名、3年=260名、4年=18名

(11) 科目の種類ごとによる比較

科目を以下の3つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

- ・ 共通科目と専門科目
- ・ 必修科目と選択科目
- ・ 受講生が40名未満の科目と40名以上の科目

[共通科目と専門科目の比較]

図7は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は97科目である。なお、学部共通科目12科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目と専門科目ともに全ての項目で4.0以上であり、「授業方法」は特に平均評価点が4.4を超えていた。

子ども教育学科は、「授業方法」以外の設問において共通科目より専門科目で評価が高く、共通科目は全設問の平均評価点が4.2程度、専門科目は4.3程度であった。

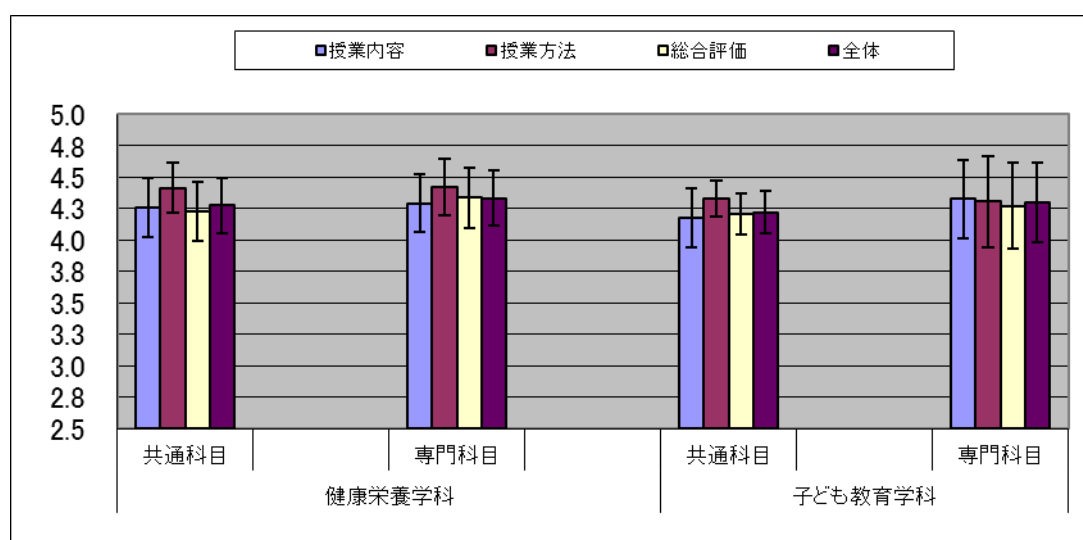


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点(±SD)
共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で6、43科目、
子ども教育学科で6、42科目

[必修科目と選択科目の比較]

図8は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は97科目である。

健康栄養学科では、必修科目と選択科目の各設問の平均評価点は概ね4.2~4.5の範囲内であった。子ども教育学科では、必修科目の各設問の平均評価点は4.1程度に集中し、選択科目は4.3以上に集中していた。

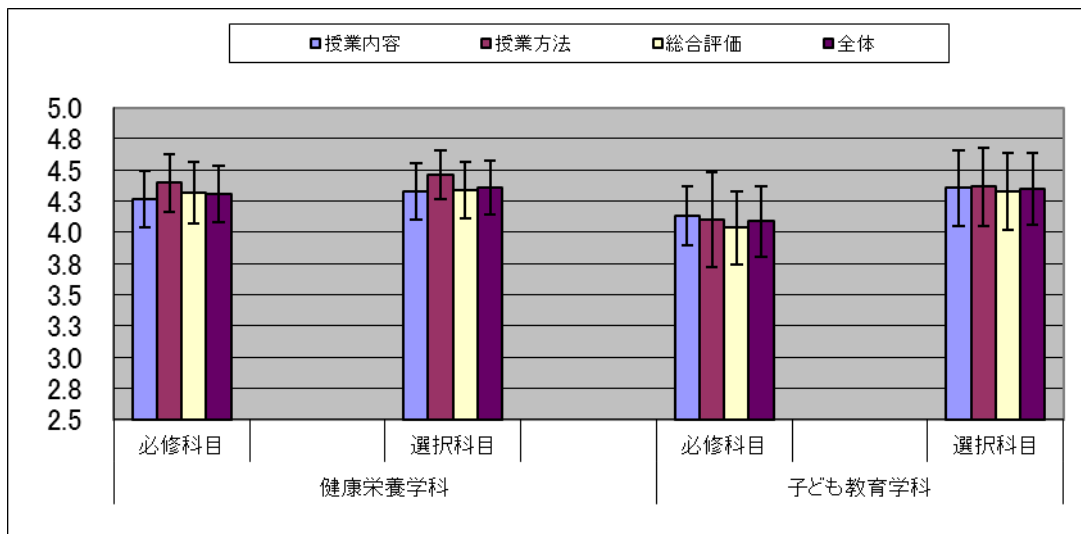


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)

必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で 31、18 科目、
子ども教育学科で 10、38 科目

[受講生数による比較]

図9は、受講生が40名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は97科目である。

健康栄養学科での各設問の平均評価点は、40名未満の科目においてすべての項目で4.3以上、40名以上の科目において4.1~4.3の範囲であった。

子ども教育学科での各設問の平均評価点は、40名未満の科目においてすべての項目で4.3前後、40名以上の科目において4.1程度であった。

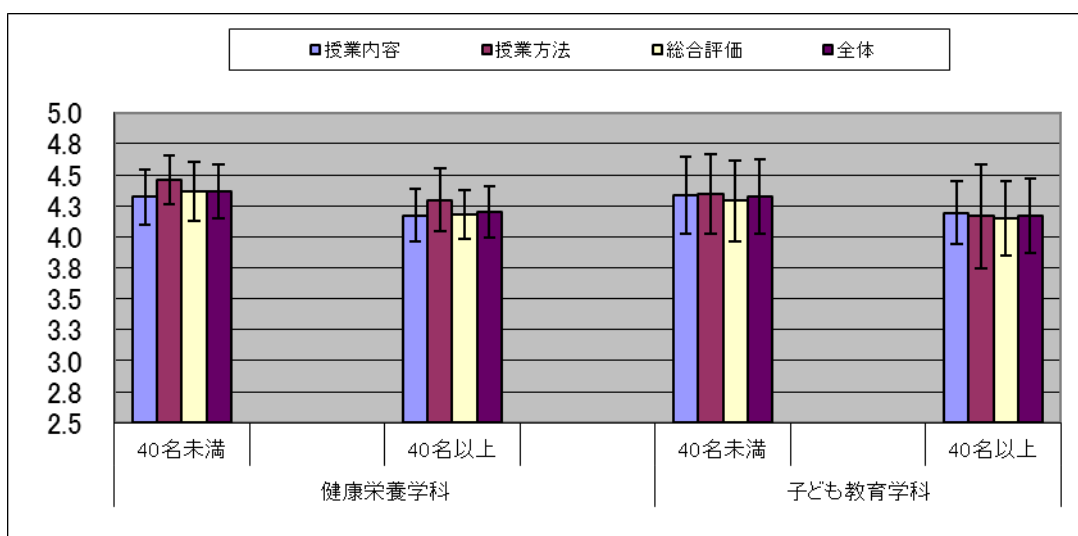


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

40名未満、40名以上の科目数は、健康栄養学科で 38、11 科目、
子ども教育学科で 39、9 科目

[科目個々の受講者数と評価点との関係]

図 10~12 は、学部全体および各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。全体の相関が $r = -0.20$ であった。昨年度全体の相関は $r = -0.28$ であった。学科別にみると健康栄養学科は $r = -0.28$ 、子ども教育学科は $r = -0.13$ であった。

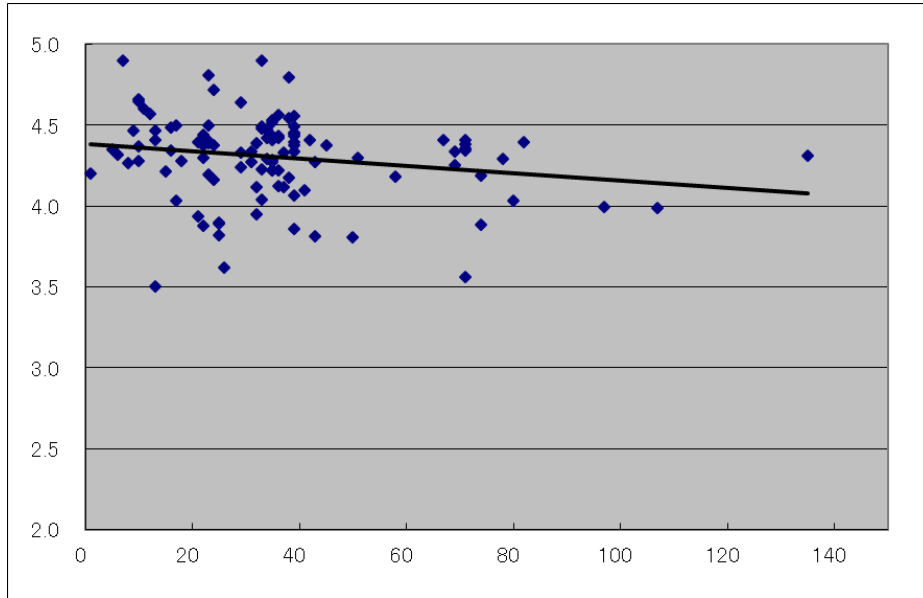


図 1 0 人間生活学部 履修者数 (横軸) と授業評価点 (縦軸) との相関
 $r = -0.20$ (n=108)

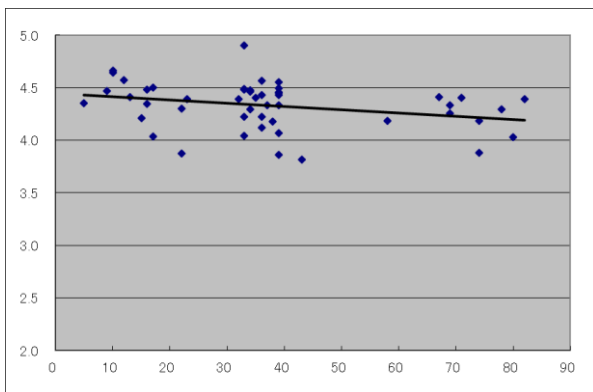


図 1 1 健康栄養学科
 $r = -0.28$ (n=49)

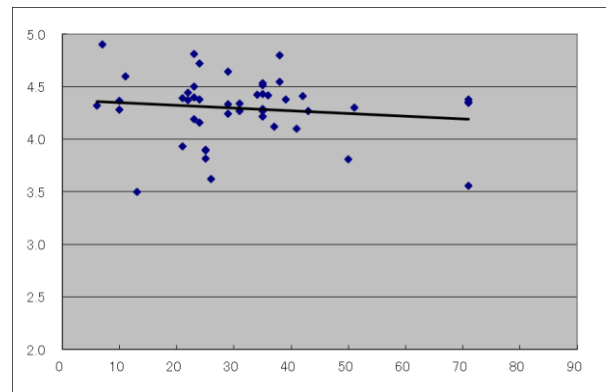


図 1 2 子ども教育学科
 $r = -0.13$ (n=48)

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図 13 に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が 2、4、43 科目、子ども教育学科が 2、4、42 科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は子ども教育学科の専門科目で 60%未満であった以外は、65~75%程度であった。

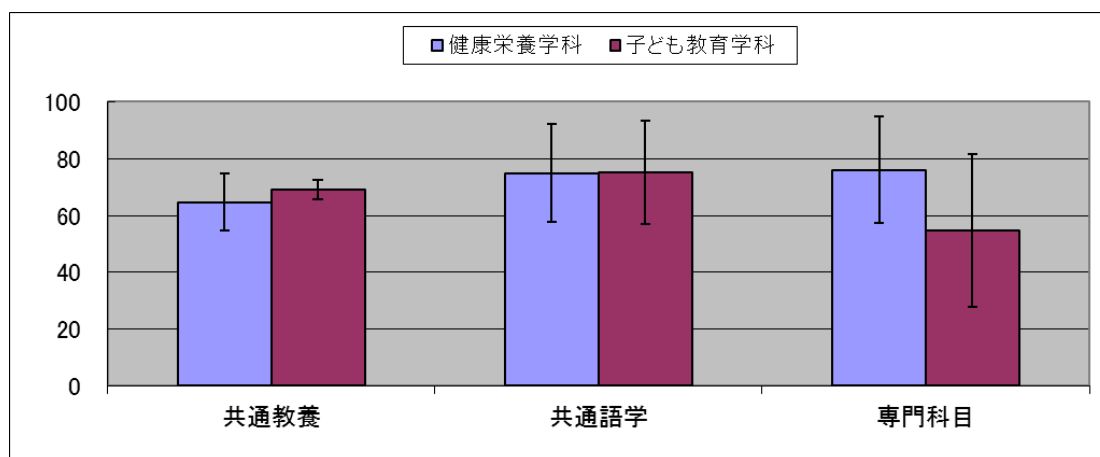


図 1 3 各科目の平均回収率 (±SD) (%)
 それぞれの科目数は、健康栄養学科で 2、4、43 科目、
 子ども教育学科で 2、4、42 科目

(1 2) 学外での学修時間

[健康栄養学科]

図 14 は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は 1 年生が 615 件、2 年生が 563 件、3 年生が 347 件、4 年生が 38 件であった。授業外学修時間 1 時間未満の者は 1 年生で 30%程度、2 年生以上では 20%程度を占め、2 時間以上の者の割合は 1 年生で 20%以上、2 年生以上では 40%前後であった。

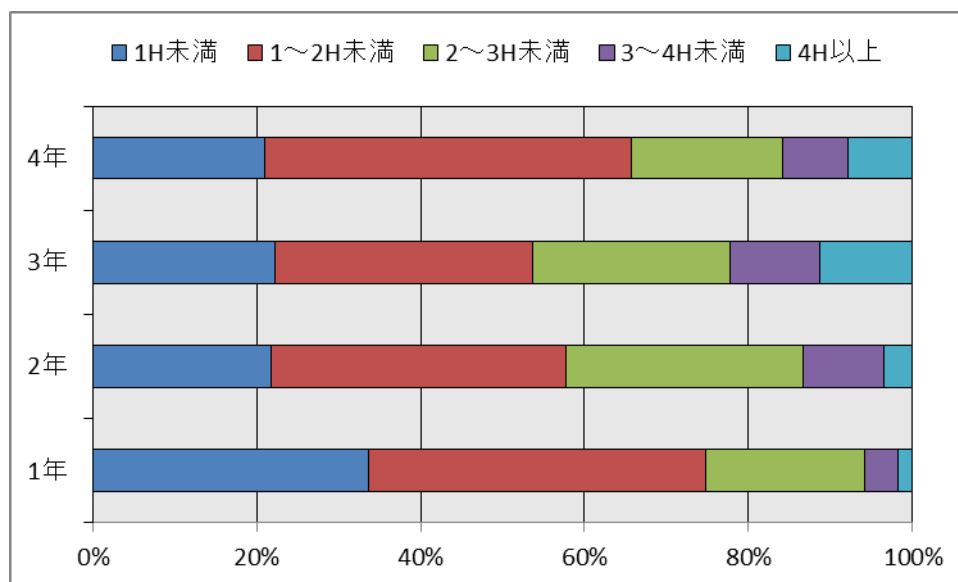


図 1 4 健康栄養学科の授業外での学修時間

[子ども教育学科]

図 15 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1 年生が 550 件、2 年生が 262 件、3 年生が 264 件、4 年生が 18 件であった。1 時間未満の比率が 1、4 年生で約 40%、2~3 年生では 30%程度であった。

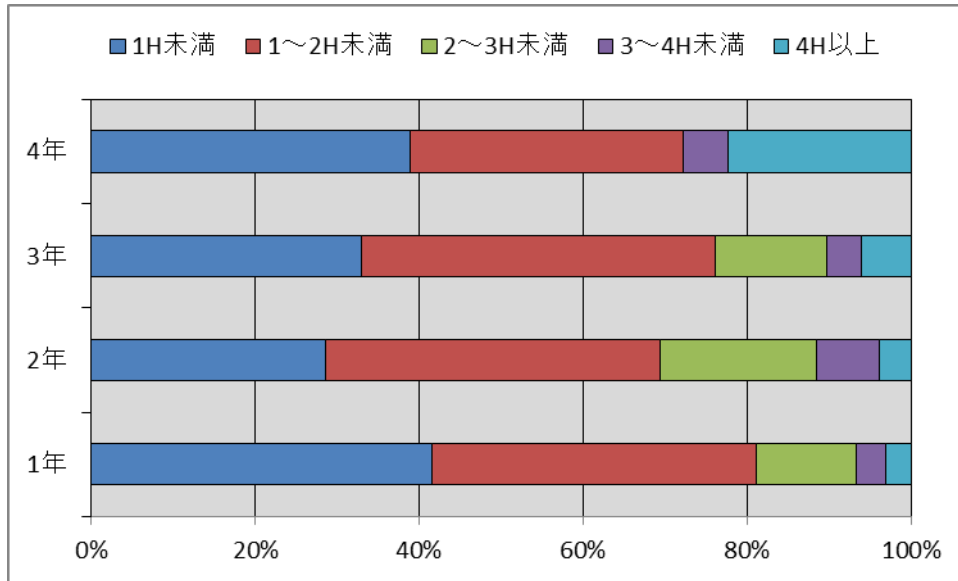


図15 子ども教育学科の授業外での学修時間

(13) 学修行動について

[健康栄養学科]

図16は、健康栄養学科での学修行動について比較したものである。「授業に関して積極的に質問を行った」および「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の項目は1年生において他の学年よりも平均評価点が低く、4年生では他の学年よりも高かった。

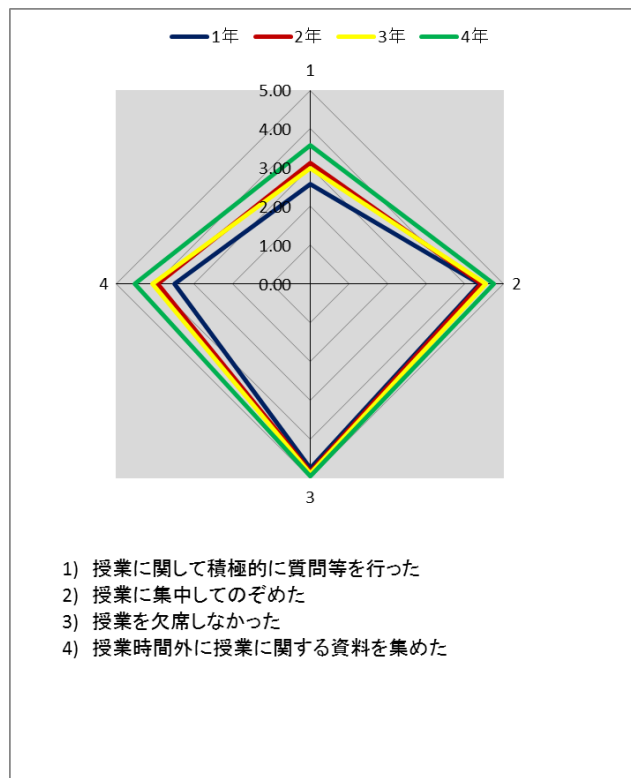


図16 健康栄養学科の学修行動

[子ども教育学科]

図 17 は、子ども教育学科での学修行動について比較したものである。1 年生の「授業に関して積極的に質問を行った」は他の項目に比べて低かった。また、4 年生は全項目について他の学年よりも平均評価点が低い傾向がみられた。

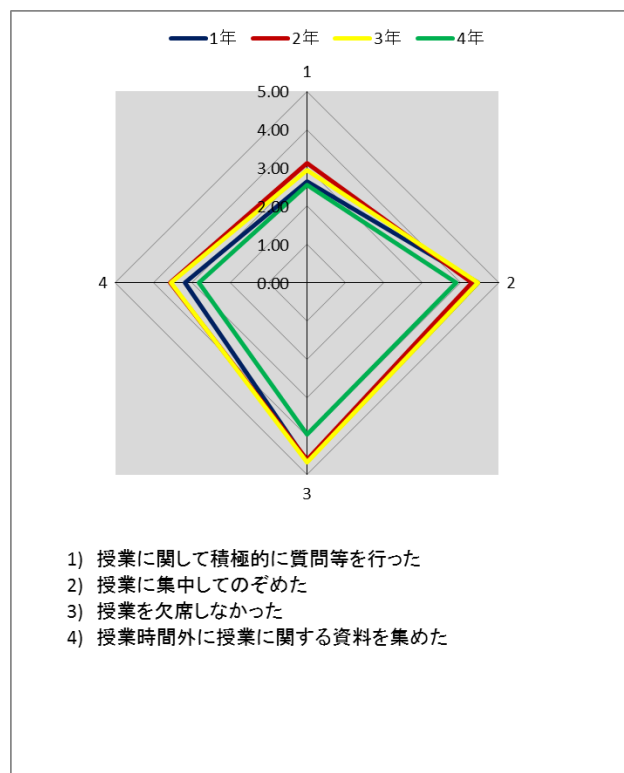


図 17 子ども教育学科の学修行動

(7) まとめ

令和 2 年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。本年度は全体に回答数が少なく前年の 75%程度であった。これは例年の授業内で授業評価アンケートを配布しその場で回収するという形式から、ウェブ形式のアンケートに自らアクセスして回答する形式に変更されたことが影響した可能性があると考えられた。

学外での 1 日あたりの平均的な学修時間については 1 時間未満の学生が減少し、例年に比し全体的に学修時間が増加していた。これには、遠隔授業の導入とこれに伴う課題の増加が関与していると考えられた。また、学修行動について両学科ともに 1 年生で「授業に関して積極的に質問を行った」が低値を示しており、入学後、登学機会が少なく教員や学生間の交流が制限された学修環境が一因ではないかと思われた。

今後もこのような調査を継続して実施し、学科や学年毎の特性を分析した結果を教員が共有し教授内容の向上に反映させていくことが重要と考えられた。

(報告：池田 涼子)

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

3. 令和2年度 大学院授業評価アンケート調査結果

3.2 後期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

本報告書は、令和2年度後期に開講された科目の内、院生による授業評価が実施された5科目についてまとめたものである。今年度も学部と同じ5段階評価のWeb方式による記名式授業アンケートを実施した。得られた結果について、授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点に関して検討した。また、担当者独自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。なお、新型コロナウイルス感染症対策のため、一部の科目が遠隔授業あるいは11月上旬まで遠隔授業でその後面接授業となったものであるが、データを処理する際には、その違いについて考慮されていない。

(14) 必修科目と選択科目の比較

図1は履修形態ごと(必修科目と選択科目)の評価点を示したものである。分類した必修科目数は2科目、選択科目数は3科目であった。必修科目については、ほぼすべての項目において評定点が4.5を以上になっており、昨年度後期よりも高い評価がされていることがわかる。しかし、選択科目については、いずれの項目も必修科目より低くなっており、また昨年度後期よりも低くなっている。特に授業方法については昨年度よりも0.8近く下がっている。必修科目については、かなり高い評価がされており、授業改善の効果が表れている。しかし、選択科目については、来年度以降授業方法を工夫するなど、改善の必要性がある。ただし、今年度は遠隔授業も行っていたため、大学院にふさわしい方法を取ることが難しかった可能性もある。

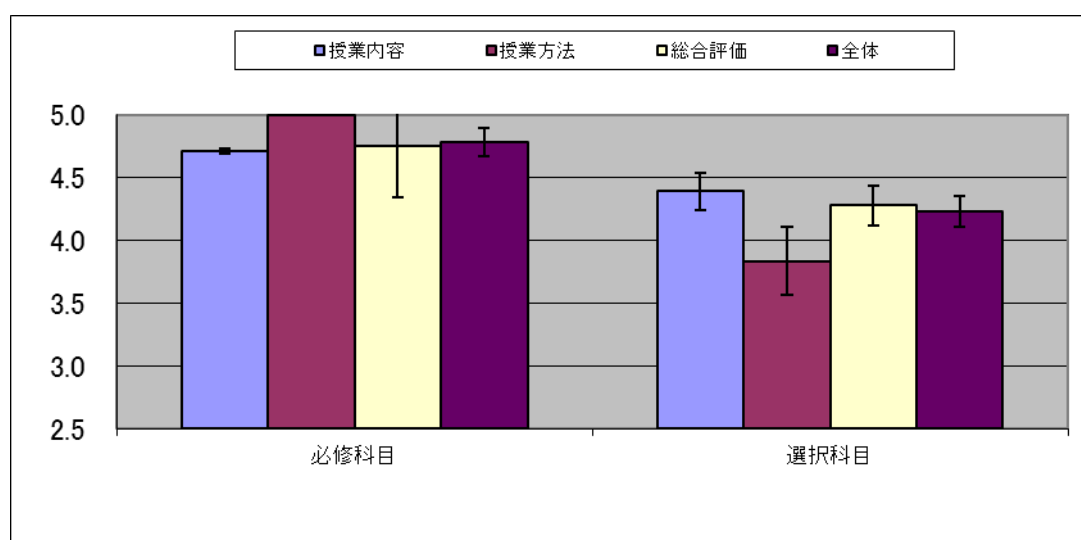


図1 共通科目と専門科目別の平均授業評価点(±SD)

必修科目と選択科目数は、2、3科目

(15) 講義科目と演習・実習科目の比較

大学院の授業に関して、特に公認心理師や臨床心理士養成の要ともいえる演習・実習科目は重要なものであり、課題等の院生に対する負荷も大きいと考えられる。また、昨年度より導入された公認心理師科目によって、演習・実習科目の重要性や院生への負担が増している。そのため授業形態ごとの比較を行った。

図2は授業形態ごと（講義科目と演習・実習科目）の評価点を示したものである。分類した講義科目数は4科目、演習・実習科目数は、1科目であった。講義科目において各項目の評定点は4.5を下回っており、特に授業方法はどの項目より低くなっている。ただし、各項目とも4.0を超えており、全般的には比較的の高い評価がされていることがわかる。他方、1科目のみではあるが、演習・実習科目については、授業内容と授業方法が昨年よりも高くなっており、総合評価については昨年度と同程度で、良好な状態であった。実習・演習科目については、後期開始時点より面接授業としたが、講義科目については遠隔授業で開始し11月上旬より一部の授業では面接授業とした。大学院の講義は、少人数で活発な発言や発表、ディスカッションを行うものであるが、双方向型の授業であっても遠隔授業では十分にコミュニケーションが取れなかった可能性がある。遠隔授業体制で起こった問題点をもとに、今後、大学院教育の特性に合った教育方法について、各担当教員の工夫のみならず、研究科全体で議論する必要があると言えよう。

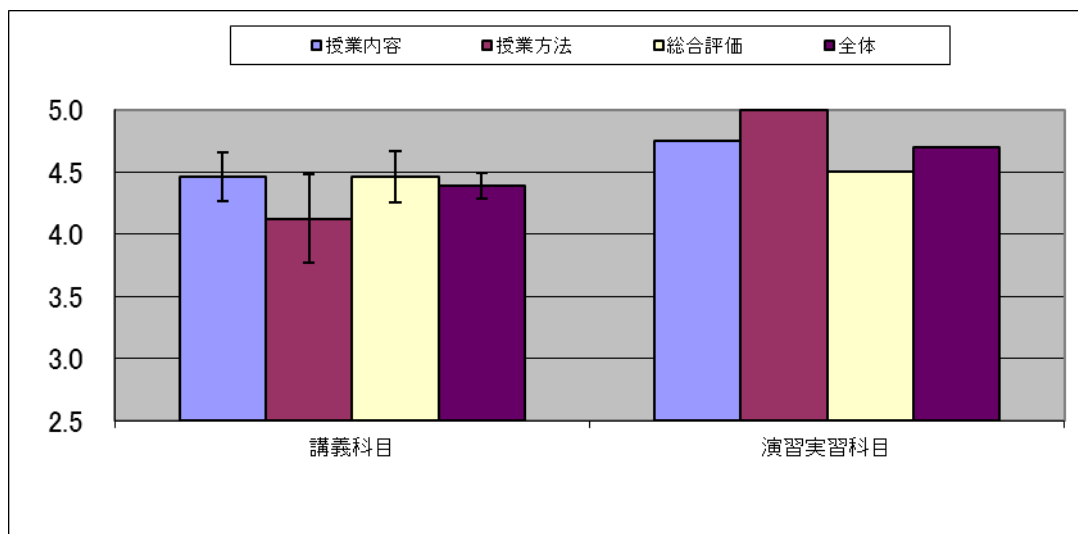


図2 講義科目と演習実習科目別の平均授業評価点（±SD）

講義科目と演習実習科目数は、4、1科目

（報告：杉島一郎）